

ロンボク島の高地の伝統的稲作

アリス・ポニマン,* 高谷好一**

Traditional Rice Cultivation on Lombok

Aris PONIMAN* and Yoshikazu TAKAYA**

Semalun Bumbung, a mountain village in Lombok, still maintains a traditional mode of rice cultivation together with its related rituals. Land is prepared for cultivation by using a herd of cattle to trample the ground repeatedly; neither plow nor hoe is used. An eight-month variety of rice with large, red grains is transplanted into the prepared plots. The belief in "mother rice" is still very

strong, and a series of rituals is observed to encourage this goddess at different occasions from sowing to storing of the harvest. Traces of a Melanesian way of thinking are also found, in that some people say that they should be careful at the time of harvest because their ancestors may become envious of their harvest and do some mischief.

1985年1月、たまたま数日間、ロンボクに立ち寄って、その稲作を見る機会があったので、そのことを報告する。ロンボク島はバリ島の東にあり、バリ島より一段小さい島であるが水田は多い。ここに述べようとするものは、そのうち火山中腹の高標高地 Semalun Bumbung のものである。

I Semalun Bumbung

図1はロンボク島北東部の地図である。Semalun Bumbung は Rinjani (3,726 m), Nangi (2,330 m), Anakdare (1,924 m), Pringi (1,832 m) 等の火山に囲まれていて、一見カルデラの底にあるかのように見える。集落中央の標高は約1,050 m である。

図2は Semalun Bumbung を通って北岸の

Tanjung Tengah から東岸の Pringgabaja に到る道にそった断面図である。北岸の Tanjung Tengah から標高700 m ぐらいまでは、ほとんどの所が二次林と藪である。耕作はほとんどない。標高約800 m に到って Bawanao の集落がある。ここにはかなり広いオカボ畑がある。上の村を過ぎると、3-4 km の間はまた藪が広い。そして、Semalun Bumbung の大きな集落と水田に到る。

Semalun Bumbung は768戸の家と260haの水田を持っている。その北隣りにある Semalun Lawang はそれより少し小さい集落だが、この2集落を合わせると、約400haの水田があり、これが、この火山中腹の凹地の水田団地を作っている。

Semalun Bumbung から東海岸に出るには、Rinjani と Nangi の二つの火山の間の高い鞍部を越さねばならない。この鞍部に到る道は広いコーヒー園の中を歩いてゆく。コーヒー園の更に上は草地になり、それが標高約

* BAKOSURTANAL, Bogor, Indonesia

** 京都大学東南アジア研究センター; The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

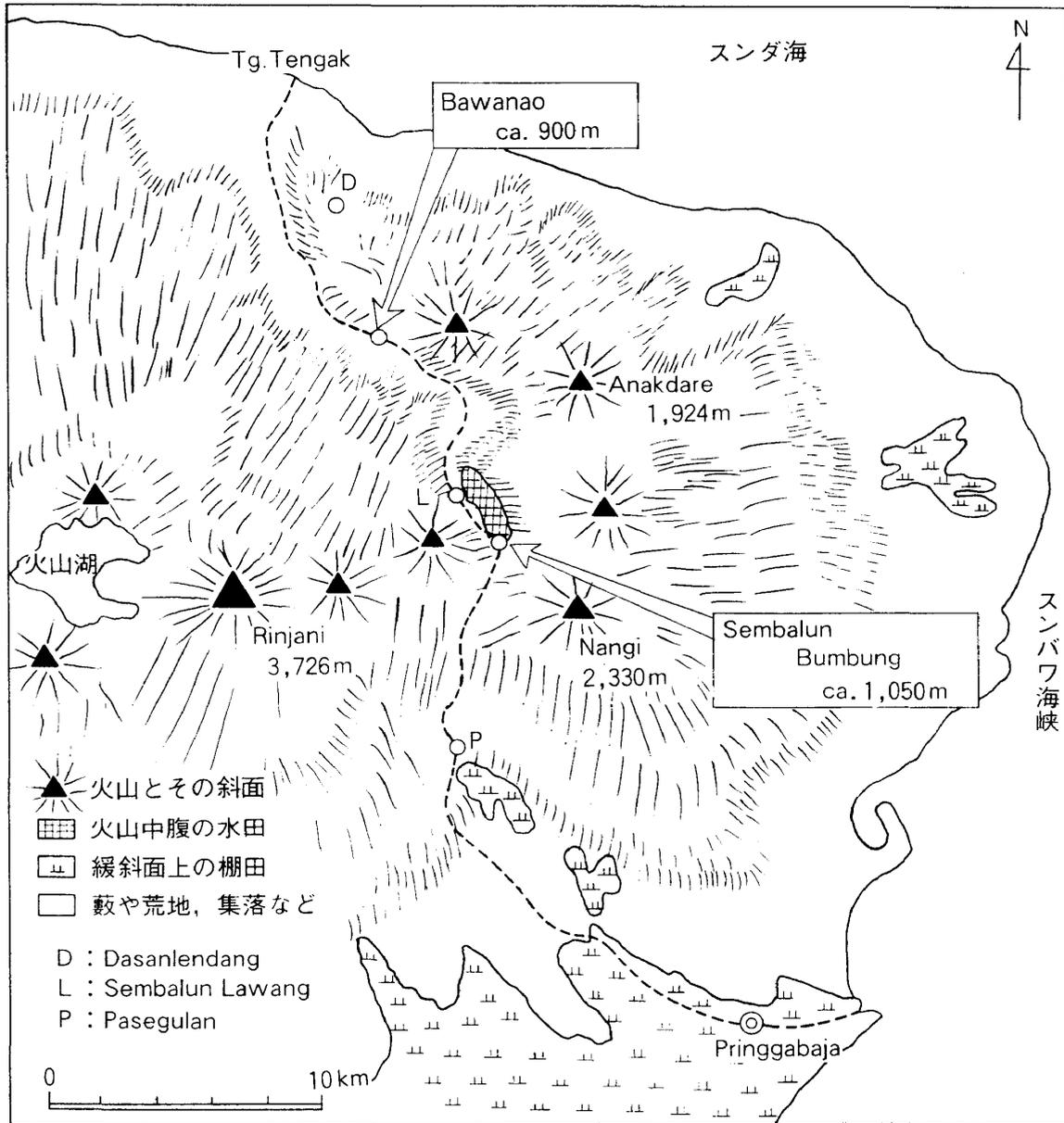


図1 Sembalun Bumbung (標高約1,050m)とその水田, ならびに Bawanao (標高約900m)の位置図。図全体はロンボク島の北東隅にあたる。

1,600 m の鞍部まで続く。草地の中には時にオカボが見られる。

鞍部を過ぎて、南東斜面に入ると、その植生は北側のそれとは一変する。深い常緑樹林が合間を覆い、道はその暗い林床を行くようになる。そして傾斜が緩くなると初めて森が切れ、オカボが現れ、Pasegulan の集落に着く。Pasegulan の集落の下方にはバナナ園が

広い。そしてそれはやがて棚田地帯に変わり、海岸までゆっくり下りてゆく。海岸には細いココヤシ帯があり、その先は、スンバワとの間の海峡である。

ロンボク島の水田の98%以上はPasegulanの下方に広がるような、火山裾野の広い棚田である。それらは全て犁耕移植田で、多くは二期作田になっている。しかし、この報告で

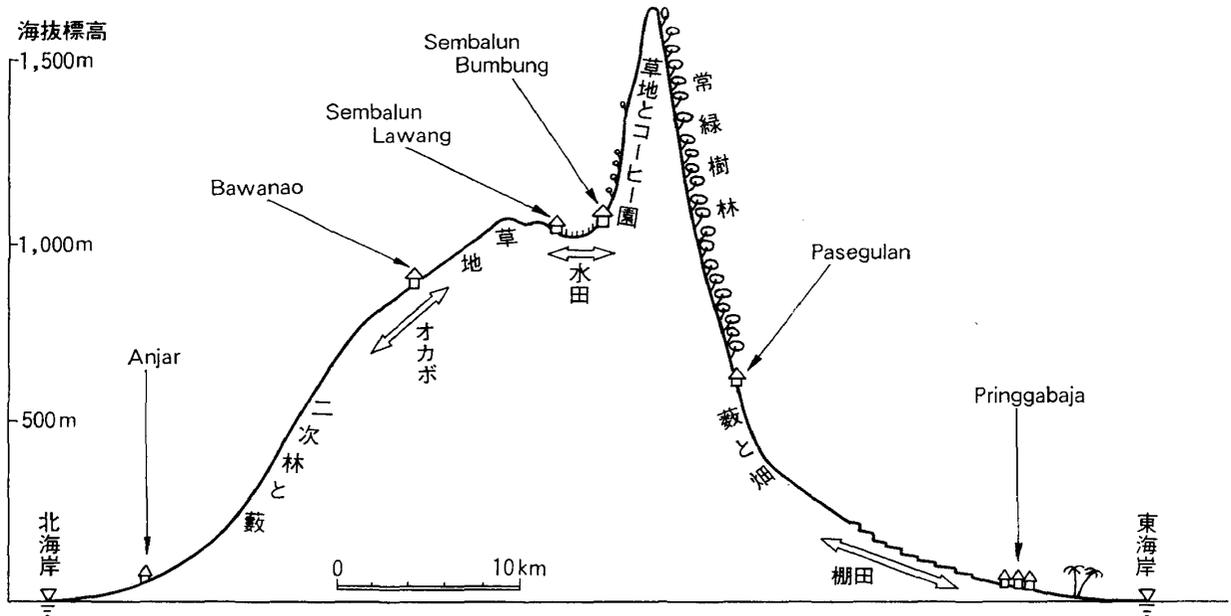


図2 Bawanao, Sembalun Bumbung を通り北海岸（スンダ海岸）から東海岸（スンバワとの海峡）にいたる断面。断面図はほぼ道ぞいにとっている。

取り扱うのはこの水田地帯ではない。もっと標高が高く、火山の中腹に孤立した水田である。

私達が火山中腹の Sembalun Bumbung に孤立した水田を調査に選んだのは、ここにロンボクの水稲耕作の祖型があると考えたからである。広い棚田地帯の多くの村々は、自分達は Sembalun の子孫だといい、Sembalun とこそは Sasak 族の持つ最も古い集落の一つだと認めている。ちなみにいうと、村の古老の話では、Sembalun Bumbung は1428年にはすでに存在しており、東征の途中たおれたマジャパヒト王国の宰相ガジャマダの墓があるという。

II 稲 作

II-i Sembalun Bumbung の水稲耕作

Sembalun Bumbung で現在行われている水稲耕作法は次の通りである。

蹄 耕

1980年代に入ってから蹄耕が減った。しか

し、それまでは、特別な深田以外は全て蹄耕で耕していた。1985年現在でも、まだ蹄耕は極めて多い。全水田面積の過半は蹄耕で耕していると見てよい。そのやり方は以下の通りである。

蹄耕をする田には、その前日もしくは前々日から集中的に水を入れる。深さ5cmぐらいに湛水する。そして長大な草があってもそのままの状態、そこに、10頭から20頭ぐらいの牛を入れる。稀には40頭ぐらい入れることもある。ふつうの田は25×40mぐらいの大きさだが、その中で、この牛の一団は反時計まわりに、グルグルグルグルまわる。この時、回転の軸を少しずつ移動させていって、田全体を踏ませるようにする。

20頭ぐらいだと、3-4人の男が一団を制御する。1人が一団の先頭になって田中を歩きまわる。牛の一団は忠実にそれについてまわる。5分に一度ぐらい、その先頭の男はポケットからビニールの袋を取り出している。掌に塩をなすりつけているのである。そして、その掌を牛に向けてさし出すと、それまで疲

れて、だらけ気味だった牛が猛然とその掌に向ってくる。掌の塩を舐めることができるのは、いつも、先頭を歩く特定の1頭だけである。それでも、それが勢いよく歩くと、一団全体の動きが早くなる。別の1人ないしは2人は一団の後ろにいて鞭を振っている。たいていは、もう1人か2人、これは子供が畦に立っている。時々一団から逃げ出して走り去る牛を追っかけてつれ戻す役目をする子供である。

草の生えたままで行う、この第1回目の蹄耕を *ngerpak* という。25×40m ぐらいの田だと、20頭の牛を用いた場合、1時間か1時間半ぐらいで作業が終わってしまう。この *ngerpak* が終わると、田は湛水したままの状態ですぐ1週間から2週間放置される。

この間に、田の畦修理をする。刈跡放牧中や *ngerpak* 中に崩れて保水機能を果たさなくなった畦を堅固にするのである。この畦修理には *tambak* という一種のクワか、*cepak* という一種のヘラを用いる。

第2回目に行う蹄耕を *remasak* という。これも第1回目と同じ要領で行う。第1回目、第2回目の蹄耕すなわち *ngerpak* と *remasak* を総称して *nggaro* という。

remasak を行うと、中一日ぐらいおいて *ngam ngam* を行う。これは田面に浮いている草を拾い集める作業である。そして、この直後にエブリをかける。これで植付準備は完了である。

泥が非常に深く、人間の腰ぐらいまで入る所では蹄耕は行えない。こうした所では人間がクワを用いて株をひっくり返し、これをもって本田準備完了とする。

穂播き苗代、移植、除草

ここでは全て移植である。直播栽培はない。したがって苗代を作らねばならない。苗代は穂播きである。稲穂のまま2日2晩浸水し、それを引き上げて一昼夜コモ包みにしてお

く。すると催芽するのでそれを播く。穂は蹄耕で耕した苗代の上に、2穂ずつ、縦並びに規則正しく置いてゆく。こうして、苗代に2カ月間置いておく。

2カ月間たった苗は、密植のため、線香のように細い。それを引き抜くと、葉先を切りとって、30cm ぐらいの長さに揃え、指で植えてゆく。植付間隔は30-40cm とし、2-3本ずつで1株とする。

除草は、湛水している田だと指で行う。泥をかきまぜ、草を引き抜き、それを手か足で地面の中に埋め込む。もし、田が乾いていると、*ngiskis* という一種のクワを用いる。これは両刃のカミソリに似たもので、刃渡りは約20cm、それに1.5m ぐらいの柄がついている。これで稲の株間の草を削り取る。

長期種の赤米

伝統的な稲品種といわれているものは草丈の高い大粒稲である。草丈は1.6-1.7m になる。穂の長さは20cm はある。それに300粒近い粒がつく。粒は少し長めの大粒であり、2cm ぐらいの芒がある。粒の色は黄色だが、玄米の色は赤い。ご飯に炊いたものは赤飯のように赤い。ねばり気がほとんど無く、冷えたものはパサパサして極めてまずい。

この稲には決まった作季はない。播種してから8-9カ月で収穫できる。排水の悪い所だと、水の引いた3月に移植し、10月に収穫する。苗代期間の2カ月を加えると播種後収穫までは9カ月である。排水の良い田だと、12月か1月に植え7月頃収穫する。この場合、播種から収穫までは8カ月である。

1980年頃から、政府の指導で排水路の整備がなされ、稲とトウモロコシの二毛作が導入された。この際、新たに導入された稲は白い玄米の5カ月種であった。これ以後、在来の伝統種は *pade abang* (赤米の意。以下植物の呼び名などは、全て現地で使用されている言葉。Sasak 語と思われる。) と呼ばれることに

なった。伝統種は全て赤米であった。

穂 摘 み

稲は穂摘具 (rangkap) で摘みとる。摘みとった稲は直径3 cm ぐらいの小束 (angka) にし、野小屋の近くで、2-3日地干しする。乾き上ると、これを2束合わせて大束 (netep) にし、集落の中にある米倉 (geleng) に運んで収納する。geleng は高床でネズミガエシのついた建物である。

穂摘みは熟したのものから摘むようにし、1筆の田は2-3回に分けて収穫する。この時特に大きい穂は種子用に別途保存する。別に種子用の粃を作る特別の区画があるわけではない。

最終回の摘み取りの時には、未熟なものも全て摘む。ただし、未熟なものはそれだけを集めて別の束にする。これは野小屋では乾かさないうちに、摘みとった日に持ち帰り、すぐに穂のまま土釜で煎る。そして、まだ熱いうちに臼に入れて搗き偏平な焼米にする。これは emping (Sembalun) または odak odak (Bawanao) と呼ばれている。ふつう、ココヤシミルク、ヤシ砂糖などと混じて食べる。

柵作りと水利調節

768戸ある Sembalun Bumbung の村統計によると、この家畜は牛456頭、水牛0頭、馬86頭、山羊208頭である。村人の話では、牛は実際にはこの統計に表れた数値の3倍ぐらいはいるという。村内で最も多く牛を所有する人は1人で70頭持っているし、ちょっとした牛持ちだと5-6頭は持っているという。牛を持たない人もいるから、平均すると1戸あたり2頭ぐらいの見当になるというのである。

集落には牛舎というものがなく、全てが完全な放牧である。一年中、高みの草地にいて、田拵えの時だけ、つれて降りて来られるという。飼主はその時になると、草地に行き大声で呼ぶ。すると牛が集まって来るといふ。

ところで、何分放牧であるから、うっかり

すると牛が水田に入り込む。牛だけでなく、山羊も馬も放し飼いだから、同じように水田に入りこむ。それで水田には柵が必要になる。水田には、それを取り囲んで、パンダナスや灌木の生垣がしてあるが、それだけでは不十分なので、厳重な柵作りをする。村の水田団地全体を囲い込む柵を作るのである。これは村での重要な共同作業の一つと考えられている。

周りの山から流れ込んでくる谷川の水は豊富だから、水争いの起こるようなことはほとんどない。しかし、それでも、蹄耕をしようとする田などは、作業の2-3日前から多量の水を必要とする。作業を、かけ流しの状態でしようとするからである。こんなわけで、充分にある水とはいえ、作業の円滑な遂行のためには、ある種の水管理が必要になってくる。

上の柵作りや配水を指導する役目として、村には昔から pekasi という村役人がいる。

II-ii Bawanao のオカボ栽培

Sembalun Bumbung にもオカボ作りが全くないわけではない。しかし、オカボが広く作られているのは、Sembalun の北隣りの Bawanao である。Bawanao は Sembalun のような古い村ではない。その昔、Sembalun の近くに居たが、何代か前に火山南麓に下り、そこで Masbigik という集落を造って棚田耕作をしていた。しかし、この Masbigik が過密になり、その一部が1930年にまた山に上ってきた。こうして造られたのが Bawanao である。ここは水利の便が悪く、水稻が作り難い。それで、もっぱらオカボに頼っている。以下はそのオカボ栽培の様子である。

短期休閑畑

オカボは短期休閑畑とも呼ぶべき畑で作られる。2-3年から、5-6年連続耕作したあとは、数年から、5-6年休耕する。この種

の畑では、初年度は藪や灌木林を開くことになる。その初年度の伐開、火入れ、穿孔、点播の方法は普通の焼畑の場合と同じである。ただ、2年目以降は、浅く耕すことになり、いわば常畑に近い耕作法になる。

Bawanaoの場合、この短期休閑畑は耕地の形態としてみると、普通の焼畑の場合と全く違う。しばしば、耕地が幅1m、深さ1mといった空濠(petak)で囲われ、時に空濠の内側に、さらに柵が設けられたりしているからである。こうした空濠は耕作の初年度に作られる。あるいは、休耕していた土地で再度耕作を行う時には、その時、あらためて大修理がされる。

耕地はこうして、いわば常設の耕地のごとく造成されたものであるが、耕地に対して個人の所有権があるというものではない。たてまえとしては、休耕された土地に対しては誰が耕作に入っても良いということになっている。しかし、実際にはそういうことはなく、濠の掘られた土地はまるで個人の所有であるかのように、いわば占有的に使用されるという。

2年目以降の整地

2年目以降の地拵は初年度に行う焼畑のそれとは全く違う。クワ(tambak)で土を3-4cmの深さに耕す。これは耕すというよりも、むしろ雑草を削り取ることが主目的であるといってもよい。この作業はmbrombakといわれる。こうして削りとられた草は、しばらくそのままにして乾かした後、ngarengという5本歯の熊手で掻き集めて小山に積み焼くか、または畦状に積みあげる。

Asakによる穴あけと点播

クワを用いた整地の後、asakで穴をあけて、そこに稲粃を点播する。asakというのは、3-4mはある長い竹竿の先に木製のヘラを挿しこんだ一種の掘具である。ヘラは幅4cmぐらいで長さ15cmぐらいである。竿の

今一方の端は、二つ割りにされていたり、時にその節に小石が入れてあったりする。この竹竿を両手で斜めに支え持ち、そのヘラ先で素早く土をはね飛ばして浅い穴をあけてゆく。すると、その後ろに続いている女がそこに粃を数粒ずつ入れてゆく。

男達は素早く踊るように調子を取りながらこの作業を続けてゆくので、asakの先が、ちょうどカスタネットのようにパクパクと音をたてる。男達は誰もが腰に鞘入りの山刀をつけているから、それがまた一緒に、カタカタと音をたてる。少なくとも4-5組が、しばしば10組以上が、同じ畑に入って、調子を合わせてこの作業を行うから、それは賑やかな音の競演になる。もうすぐ雨が来て、草も木も萌え出るといふ期待に人々の心は浮き浮きしているので、この種子播きは、まさに楽しい祭りのものであるという。何人かの人達は、このasakの先端に、サトウヤシの若葉で包んだチマキをぶら下げて、また一種かわった音を出すという。こうしたasakは、そのカスタネット風のパクパクという音のためにpak pakとも呼ばれている。

混播

オカボの播種が終わると、その畑には雑穀を混播する。まず、畑の周辺にモロコシ(beleleng)をまく。これにはasakは用いない。najukという普通の穿孔棒を用いる。najukは直径3-4cm、長さ1.2mぐらいの、ただの木の棒である。これを片手に持ち、土地を垂直について孔を穿つ。

畑の周辺のモロコシ播きが終わると、すぐにオカボの間にトウモロコシ(jagon)、アワ(batam)、ハトムギ(elas)、リョクトウ(botor)、ササゲ(kacan panjang)などを播く。これらも、やはりnajukで穿孔して、そこに播く。この雑穀の播種は家族単位で行うもので、オカボ播種のように共同で賑かに行うものではない。

アワは *batam* が普通の呼び名だが、*jawa bine* とも呼ばれる。雑穀の中で、このアワだけは特別なものと考えられている。そして、これだけは点播ではない。最も一般的な播種法は散播である。すでにオカボの点播されている畑にバラ播かれる。次に多い方法は、オカボの点播のために *asak* で穴をあける時に、竹竿と掌の間にアワを挟んでおく方法である。こうしておく、*asak* を動かすたびに、少しずつアワが落ちる。第三の方法は一種の散播だが、口に含んでおいて、吹きつけるようにして播く方法である。*Bawanao* には見られないが、火山南麓のいくつかの村では、アワの移植がある。これは15日ぐらい苗代においておいたアワを畑に植えつけるものである。

混播された畑は、育ち出すと全体としては、オカボ畑に見える。そして、その中に、ちらほらと他の作物も混じっているといた格好である。ただ、畑の周りのモロコシだけはかなり規則的に、ちょうど柵のような格好に植えられる。

オカボはほとんどが播種後5カ月で実る。有芒の大きな穂をつけるものが多い。ふつうは籾は黄色で、玄米は白いものだが、時に籾の赤紫色のものがある。この場合も玄米は白い。混植されているトウモロコシやアワは稲よりも1カ月から半月ぐらい早く実る。一方、畑の周辺に植えられるモロコシは稲と同じか、むしろそれより少し遅く収穫される。

ちなみに、シコクビエはここでは知られていない。

除草、間引き、鳥追い、収穫

オカボ栽培作業のなかで最も多くの時間がかかるのは除草である。生育中には少なくとも2回の除草が必要である。除草にはふつう前記の *ngiskis* が用いられる。また、小さな手グワの用いられることもある。

除草時の今ひとつの重要な仕事は過密気味

に混播されている作物の間引きである。アワなどは、特に密に播かれているので、これを間引く。

野豚の侵入を防ぐために空濠と土手を築くことはすでに述べた。それと別に、鳥追いがまた不可欠である。登熟期になると、人々は畑の中の見張小屋に一日中とどまって鳥を追う。

収穫の方法は水稻の場合と全く同じである。穂摘みをして、2-3日間畑で乾かした後、屋敷内の米倉に入れる。

オカボの後

オカボを数年作った後はそのまま休耕し、藪に返す場合が多いが、時にはイモ類を植える。こうした場合、今日ではキャッサバやサツマイモを植えることが多いが、以前はタロイモの類を多く作った。これには *tojang* と *loma* がある。*tojang* はオヤイモ型のタロイモである。*loma* は *tojang* より少し背が高く、葉の形も少し違う。*Corocasia* の *tojang* が葉の中央から葉柄を出すのに対して、*loma* は葉のくびれの所から葉柄が出ている。イモは比較的小さなものが多くつく。*loma* はたぶん *Xanthosoma* であろうと思われる。*loma* は *tojang* より美味ということで *tojang* より多く作られる。

タロイモ類に劣らず多かったのが食用カンナである。これは *sebe* といわれている。*tojang* も *loma* も *sebe* も今では焼畑からは追い出されて、そのかわり屋敷地のマンゴーやミカンの木の下などに植えられている。

焼畑

集落の近くには短期休閑畑が多いが、遠くには焼畑がある。これは1年か2年耕作すると放棄し、10年ぐらいは放置しておく。耕作の方法は藪の伐開、火入れの後、穿孔、点播する。播種後の除草から収穫までの作業は短期休閑畑のそれと同じである。

この種の焼畑は近年はほとんど消滅しかけ

ている。政府が森林破壊につながる焼畑を禁止したからである。かわって、短期休閑畑の面積が増えている。

Ⅲ 稲作儀礼

Ⅲ-i Sembalun Bumbung の例

以下に述べるものは、Sembalun Bumbung で今日なお忠実に行われている儀礼である。ただし、以下に述べる情報は Sembalun の住民から直接に聞いたものではない。峠を南に越した Sewela の郷土史家から聞いたものである。Sembalun では儀礼に関して質問しても何故か答えが全く返って来なかった。

Nyalamat ruban

これは稲作最初の儀礼である。苗代播種が近づくと、吉日を選んで、村人は村長を先頭に、村の水田の最上流にある泉に行く。この時、人々は自分の持っている最上の着物を着てゆく。泉に着くと、そこで水牛を殺して、その首を土中に植え、泉に向かってその年の豊作を祈る。この後、人々は水牛の頭以外の部分をそこで料理し、共食する。ご飯は各自が家から持って行ったもので、それを食べる。もし肉が余ると、それは村に持って帰り、参加しなかった人達にも分け与える。

この共食が終わると、各自は持参した小さい容器に泉の水を入れ、それを家に持ち帰り、母稲 (ina ina) の稲穂に振りかける。こうしておく、その年の稲は虫に食われたり、病気になったりしない。

Mangayu ayu

これは nyalamat ruban に付随した儀礼である。泉の前で水牛を犠牲に捧げ、泉に豊作を祈った後、天に向かって別の祈りを捧げる。これを mangayu ayu という。これはもっぱら雨乞いが主目的である。

Nanda

苗代の稲が1カ月半から2カ月になって植

付けが必要になると、人々は斎田 (tanda) への儀礼的植付け (nanda) をする。tanda とは水田の一隅に、1m 四方ぐらいで特別に清浄に囲い込んだ所である。ここには母稲 (ina ina) を植える。この母稲の移植作業が nanda である。その田の植付けの前日、まずここに儀礼的な田植えを行うのである。

Nyalamat pertama

田植えが終わって約2カ月すると行う。別にとりたてたことは行わないが、モチ米のお粥を作って家族全員で食べる。

Nyalamat kedua

植付け後3カ月ほどたった時この儀礼を行う。これは totando に鶏の血を塗る儀礼である。totando とは tanda (斎田) をとり囲んでその四隅に建ててある棒のことである。これは稲を強くする儀礼である。

Nglidrin

最初の穂摘みの前日、この儀礼を行う。これは老人が行う。その時老人はまず tanda の作ってある一隅に行き、そこで跪き、香を焚く。それから、その稲の葉5-6葉を束ねて結ぶ。それが終わると立ち上り、香を持ちながら、反時計まわりに畦を歩き、次の隅に到り、再びそこで跪いて、そこにある稲株の葉5-6枚をまた結ぶ。香を焚きながら、同じように、第三の隅でも結び、最後にもう一度、tanda のある隅に帰って来て、もう一度ゆっくり香を焚く。

これは翌日に行われる穂摘みを稲に通告する儀礼だといわれている。こうして収穫を通告し、稲魂が他に行かないように、それを稲の中に結び込む儀礼だといわれる。老人が田の四辺をめぐって儀礼をとり行なっている間に、田の近くまたは家では鶏が殺される。これは田や稲に捧げる鶏ではなく、老人に捧げる鶏だといわれる。

Tanda の摘取り

nglidrin の翌朝、まだ夜の明けきらないう

ちに老人は *tanda* に来て穂摘みをする。摘み取った穂は2束に縛り、それを野小屋 (*dangan*) の梁の上に置く。

本田の摘取り

その日、本田の摘取りが行われる。摘取りは何人もの手助けが要り、多勢で行う。摘み取られた穂は小さな束にされ、野小屋の脇の空地にきれいに並べて干される。全ての穂束が並べ終わられると、先に摘みとって梁の上に置かれていた2束が持ってこられ、並べられた穂束の上に置かれる。

Ina ina 作り

2-3日乾かしておくとも穂束は完全に乾き上り、米倉への収納が可能になる。こうなると、例の2束は大きな1束に結いなおされ、母稲 (*ina ina*) の姿に整えられる。この時、この *ina ina* の中には、手頃な大きさの石が縛り込まれる。こんなに重い稲穂が来年もまた出来ますように、という祈りをこめて石が入れられるのだという。

こうして *ina ina* の形が整えられると、それは籠に入れられ、女が頭の上に乗せて、家の米倉に運ぶ。

Ina ina の収納

米倉に持って来られた *ina ina* は、まだ他の稲穂が到達する前に、その米倉の床の中央にソッと置かれる。これが終わると、その他の稲穂が運び込まれ、それらは *ina ina* の上に、次から次へと高く積み上げられてゆく。

Ina ina への謝罪

もし過って、*ina ina* を野小屋の梁から落したり、米倉への運搬の途中乱暴な扱いがあったりすると、ただちに鶏を殺して、*ina ina* への謝罪をしなければならない。そうしないと *ina ina* が怒って他所に行き、翌年から米がとれなくなる。

新米の食べ始め

収納した稲穂はその翌日から消費してよいというわけではない。約1カ月の間はそのまま

まにしておかなければならない。そのうち村長からの告示がある。するとその日、人々はモチ米を炊き、鶏を殺して共食をする。これが済むと、その翌日からは新米の消費が許される。

III-ii Bawanao の例

水田を持たない Bawanao には泉で水牛を犠牲にする *nyalamat ruban* はない。しかし、*tanda* (斎圃) にあたるものはここにもあり、それは *mopor* と呼ばれている。*mopor* への播種儀礼以下は Sembalun の場合とほぼ同じで以下の通りである。

Mopor への播種

ina ina にする稲の播種は畑の一隅に作った *mopor* に行くが、ここには5穴、7穴または9穴を作りそこに点播する。*mopor* の播種を行うまでに、畑の他の部分に播種をすることは許されない。*mopor* への播種日は、別に村で決めたりはしない。各人が *telu* の法則にしたがって決める。日曜日に生まれた人は火曜日に、月曜日に生まれた人は水曜日にとり、中一日をおいた2日後の曜日に当たる日に *mopor* に播種しなければならない。*mopor* さえ、こうして決められた日に播いてしまえば、他の部分は何時播いてもよい。

(*telu* とはイスラムが導入される以前にあった Sasak 族の信仰体系である。山腹の多くの集落は第二次大戦前はほぼ全員 *telu* を信じていた。例えば、Sembalun Bumbung の村人が大挙してイスラムに転じたのが1954年だといわれている。)

Ina ina 作り

mopor の摘取りは、一般の畑の摘取りに先だって行わねばならない。その日がまた *telu* によって決められる。播種が火曜日であったなら摘取りは木曜日であらねばならない。播種が水曜日なら摘取りは金曜日である。ここ

でもまた、播種日に中一日おいた第2日目の曜日に摘取りを行わねばならない。

Bawanao では、ina ina にする穂はあまり完熟したものは良くないとされている。むしろ少し若いめのものが良い。そしてここでは、ina ina そのものは1束でよいが、別に2束を作る。この2束は夫と子供の束だという。そして、この3束をさらに1束に束ねて、米倉の一番底に入れる。

初 搗 き

ina ina とその他の稲穂を無事、米倉に収納してもすぐにそれを食べることは出来ない。まずちゃんとした感謝祭を行い、それから村長が日を決めて、初搗きを行う。

以上が Bawanao で聞いた稲作儀礼である。

あ と が き

火山中腹に孤立した村々にはまだ稲作にかんして古い耕作法、儀礼、考え方が残っている。例えば、米は人に分け与えてもよいが絶対に売ってはならないと考えている老人がまだ多くいる。古い米倉には100年もたった米のまだ残っている所があるという。米は単なる食料以上のものとして受けとられている。

蹄耕が大々的に残っていることも特筆すべきことである。これは今では牛で行われているが、かつては水牛によるものだった。蹄耕のことを nggaro というが、牛のことは sapi といい、水牛のことは gao という ことを書いておけば、この作業が元々は水牛で行われていたことが推察されよう。最初の儀礼 nyalamat ruban には牛ではなく水牛が供儀に用いられるのだという。確かなことは判らないが、実質的には水牛のいなくなった Sembalun Bumbung でも、この儀礼にだけは水牛を用いるらしい。いずれにしてもササク人はジャワ人などと違って水牛文化を持っている

たようである。

Sasak 族の稲作が典型的なマレーのそれであることは宇野円空 [1944] によってもうかがえる。同書には Sasak 族の母稲思想の強いことをいくつか例示している。例えば、穂ばらみ期の稲には、ちょうど妊婦に与えると同じように酸味の強いものを供える [同上書：272]。母稲は摘みとると小束にし、葉をつけて鬚とし、首輪をつけて飾る [同上書：322-323]。また母稲は大切なものだから、食べてしまうなどということはもってのほか、と考えられている [同上書：324]。

同時に人々が悪霊を恐れることも顕著である。例えば、収穫中は djin (精霊) などという言葉を出してはいけない。悪霊がやって来て稲を駄目にするからである [同上書：322]。擔棒を田の中に置いてはいけない。やはり悪霊がやって来るからである [同上書：322]。また仮にその日に一筆が終わらず、摘み残した場合は、必ず稲の葉を結び合わせて戸閉りをしておかねばならない。悪霊が入って来るからである [同上書：322]。こうした悪霊の出現はロンボク以東のヌサトゥンガラからメラネシアにかけては極めて普遍的なテーマである。このことは、古川 [1987] がすでに指摘している。

ロンボクの古風な稲作には、マレー的要素とメラネシアの根栽文化的要素が混在している。ロンボクからフローレスにかけては、こういう観点からすると特に面白い所ではないかと私達は考えている。

参 考 文 献

- 宇野円空. 1944. 『マライシアにおける稲米儀礼』日光書院.
古川久雄. 1987. 「熱帯島嶼の稲作文化」『稲のアジア史』第二巻 渡部忠世他(編), 118-122ページ 所収. 小学館.